

学位論文審査の要旨

学位申請者	林 亜美 ジェンダー学際研究専攻2016年度生	論文題目	求職者支援訓練のジェンダー分析:受講者のエンパワメントの視点から
審査委員	主 査: 申 琪榮 教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査: 大橋 史恵 准教授		「否」の場合の理由
	副 査: 荒木 美奈子 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員: マルセロ・デ アウカンタ 准教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員: 金井 郁 教授 (埼玉大学)		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博 士 (社会科学)		<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Social Science and Gender Studies)		<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
			※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本論文は経済的に困窮する特定求職者(雇用保険受給資格のない求職者及び無職者で、最貧困層ではないが経済的に困窮している者)の公的就労支援の一つである「求職者支援制度」の実態と効果を女性の受講者のライフヒストリーから分析した。同制度は、現金給付と無料で受講できる公共職業訓練を合わせた制度で、2011年に創設された。当初より女性受講者が7割弱を占める特徴がある。求職者支援訓練の評価は主に受講者の就職率で測られているが、訓練後に就職支援は特に行われておらず個人の努力に任せられているのが現状である。それに対して本論文は、訓練後の女性受講者の生活や意識の変化に着目し、同制度の長期的な影響を分析した。制度がスタートした初期に訓練を受けた女性受講者6名の10年以上の経験について、インタビュー調査を実施して、求職者支援訓練の経験が彼女らのその後の仕事、生活、そして意識の変化にどのような影響を与えたのかを明らかにした。職業訓練を受けることは、一定期間訓練を受ける時間と受講者たちが出会う場所を伴うため、職業訓練とともに家族関係を越えた社会的ネットワーク形成の機会も与えられる。すなわち低学歴や離婚が原因で経済的に困窮し、社会から孤立されていた女性受講生たちが訓練をきっかけに仲間とつながり、学びを通じて自信をつけていく社会資本の獲得の「場」として機能したことを明らかにした。本論文はその過程をナイラ・カビールのエンパワメントの概念(「力(power)」を身につけるプロセス)を用いて、女性たちのエンパワメントのプロセスとして分析した。同時に、職業訓練は技能習得と「力(power)」を身につけることを「可能」にしたものの、女性の受講者たちの圧倒的に少ない資源、また労働市場のジェンダー差別的な構造によって、身に付けた「力(power)」を発揮することは困難であることも明らかにした。本論文はエンパワメント概念を職業訓練の効果を検討する分析に用いることで、受講生が消極的な政策の対象ではなく、不利な労働市場でも自ら状況の改善のために少ない資源を動員しながら生きる存在としてのエイジェンシーを見出すことができた点で高く評価できる。審査会は述べ3回開催された。6月30日に第1回目の審査会が開かれ全体の構成に関するコメントや理論枠組みの適切さについて議論し、8月6日に第2回目の審査会では論文構成の変更や1回目に指摘された点が改善されたことが確認された。特にインタビュー分析がとて改善された。公開発表会と最終審査会は8月27日に行い、本論文が求職者支援訓練制度の分析において新たな知見を与えたと高く評価され、審査員全員で留保なく博士論文としての水準に至ったことと判断した。

以上を総合して、本審査委員会は、本論文を、本学大学院人間文化創成科学研究科における博士(社会科学)(Ph. D. in Social Science and Gender Studies)の学位を授与するにふさわしいと判断した。